＜書　評＞

『木村伊兵衛の昭和』

(ちくまライブラリー39，田沼武能編、　加太こうじ文、筑摩書房 1990年5月刊)

唐　鎌　直　義

このような研究書ではない写真集というべき書物を、大学の研究紀要で書評の対象として採り上げることの是非は私には判断できかねるのであるが、もし失礼と非常識を犯すものであればお許しいただきたい。はなはだ言い訳けめいたことわり書きで恐縮するばかりであるが、こうした書物を選定したことの理由のひとつには、私の生来の怠慢と日頃の不勉強があげられる。今日、矢継ぎ早に出版される社会福祉関係の書物を律義に追いかける努力をしていない。もうひとつには、職業的研究者を目指す者としてこの15年余り社会調査・生活調査を自らの研究の「課題」に据えてきた。長野大学に就職してからは授業と校務から解放された週末ごとの日々を、東京や長野のいくつかの地域の調査（訪問調査、足で歩く調査）にもっぱらあてきた。地域と人々の暮しが私の研究のフィールドである。そして研究書というものをその時々の調査に役立ちうる範囲でアベイラブルに利用してきた面がある。私は真面目な学徒(student)ではなくて、調査屋(investigator) にすぎない。それもまだ生半可な調査屋にすぎない。もっとも、私が尊敬してやまないウェッブ夫妻は「大学教授の標準的戯画である博物館ほじり」を厳に戒しめている（マーガレット・コール著『ウェブ夫人の生涯』久保まち子訳、誠文堂新光社、1982年、67ページ。原著は1945年刊）。研究者の精神的資質のひとつとして「本を読みすぎて時間を浪費する弊害」に陥らないようにすべきだというのである。私はこの言葉に勇気づけられて不勉強をきめ込んでいるのだが、趣味に時間を浪費しているから、自己をそう正当化できるものではないだろう。しかし、こういう点にまで注意の及ぶウエッブ夫妻の燗眼には感服せざるをえない。アリバイ的研究はすぐに見抜かれてしまうだろう。それともこういう皮肉な（それでいて真実を見抜いている）性格はイギリス人のインテリに共通のものであろうか。私の好きなS．モームしかりG．グリーンしかり、サキしかりである。いずれにせよ、幸いにして「本を読みすぎる弊害」からはまぬがれているが、内心は、研究室で万巻の書に囲まれて読書にふける研究者を「標準的戯画」とは思えず、調査ではないこういう途もあったのかも知れないと感慨にふけることも再三である。しかし、私なりの途があると考え直すことで、自らをなぐさめている。

またこの本を選んだ第三の理由は、写真で世相をとらえるという手法が社会調査で社会的事実を発見していく手法に非常に相通ずるものがあるからである。カメラという機具それ自体は、被写体を映像としてありのままにうつしとる道具にすぎないものである。何を撮影するか、どこを捉えるかは撮る人間の「思想」の問題である。どれほど精密なカメラを使っても、撮る人間の側に感動や主張や問題意識がなければ、単に技法の優劣を競うことに終わってしまう。良い写真はとれない。そしてクローズ・アップ（強調）という手法もあれば、ボカシという手法もある。これらの点が非常に社会調査に似ていると思うのである。調査は単に事実の断片を集めればよいというものではないだろう。近年、調査の主流をなしているアンケート調査（意識調査など）のようなものであれば、ある程度誰にでも調査は可能である。調査する側

の社会認識の深さや人間理解の深さによって、存在する事実がうまく把握されたり、把握されなかったりする。そこに調査というもののむずかしさが存在すると思う。

しかしこれは、調査研究よりも思想や理論研究のほうがまさっているということではない。理論で全てが片づくならば、調査は不必要ということになる。調査の意義も立派に存在する。それは江口英一先生が主張されたように、やはりありのままの事実が訴えかける力、事実の重味ということであろう。どんなに稚拙なカメラで写しても、すぐれた写真は人々に訴えかける力をもっている。かつて大河内一男先生は、「人々が自由に自分の意見を述べることができない社会では、調査では事実は把握できず、むしろ思想の仕事が大切だ」という趣旨のことを述べられた。現在の日本は戦前と比べて格段に自由に発言できる社会になっていることは確かであるが、企業（職場）のなかや地域社会のなかでは果たしてどうであろうか。本当に民主的で自由な社会が創造されれば、調査の課題それ自体がなくなるとも考えられる。現在のように「低い」レベルの「自由社会」においてこそ、社会調査の真価は発揮されるものかも知れない。

前置きが長すぎた。さて、この写真集は著名な写真家であり、日本写真家協会の初代会長をつとめた木村伊兵衛氏（1901 - 1974年）が撮影した写真にもとづくひとつの昭和史である。昭和7年から昭和49年までの写真がおさめられ、編年体形式で、Ⅰ庶民の暮し（戦前・戦中）、Ⅱ復興の槌音（昭和20～24年）、Ⅲ変貌する街（昭和25～30年）、Ⅳ戦後が終わって（昭和31～39年）、Ⅴゆたかな昭和（昭和40年以降）という具合に編集されている。その写真は一貫して庶民（エリートや大企業労働者ではないむしろ底辺的位置にいる人々）の労働や生活・風俗・文化を対象としている。それは「隅田川（昭和28年）」と題された写真の汚穢（おわい）船のように生々しい事実を時には写し出しており、決して虚飾に満ちた華麗さ、上品さ、軽薄さをとらえていない。戦前の日本であっても、高度成長のさなかの日本であっても、時代のイデオローグというものは多数派を占めていたであろうし、そうした「発展的側面」を意図的に撮ることは容易なことであっただろう。しかし木村氏は、この写真集をみる限り、そういう側面をとらえていない。おそらく木村氏の庶民に寄せる共感（sympathy）が、こうした対象（社会の下積みとして生きる人々）への接近を選択させていると考えられる。

この視点は特にⅤのゆたかな昭和と題された章の写真に明瞭に示されていると思う。「すしや横丁（有楽町昭和42年）」にみる立派なビルディングと立ちのきを迫られている無残な古い鮨屋のコントラスト。「深川（昭和46年）」にみる高架の高速道路と川面に映る旧い民家のコントラスト。「寛永寺境内（上野昭和47年）」にみる楽しげな花見の家族づれとどこか生活に疲れてうつむいた人のコントラスト等々。木村氏は決して「豊かな昭和」を撮ろうとしたのではあるまいと思う。開発の無情さ、発展から取り残された人々や事物を訴えたかったのだと思う。（こうした写真に対して、どうして「ゆたかな昭和」というタイトルをつけたのか編者に問うてみたい気がする。）

この写真集は昭和7年から始まっているのだが、戦前の写真を含めて私がつくづく感じたことは、今も昔も日本人の生活の原点は変わっていないということである。今日経済大国と呼ばれ、かつて繁栄の極みにあってパックス・アメリカーナを謳歌したアメリカですら達成できなかった貿易黒字を、わが国は達成した。そうした経済的繁栄のただなかにある日本を、戦後の窮乏状態と同等視するのは異常ではないかと言われるかも知れない。頭がどうかしているのではないかと。しかし私が言おうとしていることは、今も昔も日本人の生活は国家の責任によって護られておらず、そうした生活の保障体系（システム）が未だ充分に社会的に形成されていないということなのである。確かに戦後の民主化のなかで社会保障制度のメニューは出揃った。メニューだけみれば日本の社会保障制度は欧州先進諸国のそれと遜色ない。だが制度はその運用の充実（内容の充実）が大切であって、ひとりの落ちこぼれもなく、生活の保障を果たしうることがその生命なのである。このいざという時の生活保障の底の薄さは、日本人の国家への信頼度を相当に低めている。いまや一世帯あたりの個人貯蓄残高は平均1,000万円に垂（なんな）んとしており、誰

ひとりとして、いざというときに国が護ってくれるとは考えていない。社会保障・社会福祉を大学で講義してきた私ですら、そう考えていない。今の日本は所得というフローとそのフローにもとづく個人的ストックで生活の「自衛」をなしうる人が多いから、問題が顕在化しないだけである。その意味で経済の発展が問題の本質・所在を履い隠しているといえる。日本にあっては経済成長を続けることが社会の本質を人々に気づかせないための唯一の途なのである。

一昨年の12月から約1年の期間をかけて、東京に住む国民年金受給高齢者の生活状況を調査して歩いた。イギリスのピーター・タウンゼントが'The Family Life of Old People'(1963年)のときに採用した方法を踏襲して、同じ高齢者の家を2度3度と訪問して親密な人間関係・信頼関係をつくり、本当の生活状況を話してもらい、そこから高齢者の真のニード・要求を明らかにするという調査方法をとった。この調査でわかったことのひとつは、今や生活保護受給者のほうが公的な生活水準に守られた生活を送っており、実質上それ以下の生活レベルの高齢者が相当数、放置されたままにあるということである。わずかな(具体的には30～40万円の)簡易保険があるという理由で、または片々たる(たとえば20坪未満)の自家自地があるという理由で、生活保護の受給を厳しく拒絶されていた。1989年現在の政府統計で、国民年金(老齢年金)のひとりあたり平均受給月額は2万9千円であり、その受給者数は全年金受給者の4割を占めているが、この金額で東京でどうやって生活していけるというのであろうか。このように、今の日本には標準的(スタンダード)な生活というものは公的に保障されていない。さらに最低限(ミニマム)の生活すら公的に保障されることがいっそう稀薄になってきている。つまり制度(メニュー)はあれど、その中身はスカスカなものに変わりつつある。そうした制度の空洞化を示す氷山の一角というべき事態が、札幌の母子家庭の母親の餓死事件であり、鳥取のおばあさんの自殺事件である。社会的に、つまり国家によって事実上護られていない生活の存在。この意味で戦後直後の日本社会も、現在の日本社会もほぼ同一なのである。経済の成長は確かにミゼラブルな生活状態にある人々の数を減少させた。しかし、国家によって護られていないという根本は今も昔も同じである。私が訪問した高齢者のいく人かの落嘆した姿、仕方がないと思いあきらめている姿に、木村伊兵衛氏がとらえた昭和の人々の姿がオーバーラップしてならない。

かえって昔はある意味で良かったといえるであろう。というのは、ミゼラブルな状態が普通の人々の常態であり、お互いに共感し合いわかり合い、助け合える素地があったからである。今は、貧しい人々は「社会的孤立」のなかにポツンと生活している。新大久保の駅前商店街の喧噪から一歩路地を入りこんだところの学生アパートに、何の身寄りもなく暮している70歳代前半の婦人を訪問した。この人は月々3万円の国民年金と4万円の貯金とりくずしで生活していた。家賃は月に3万3千円という。この人の消費生活は何と月に3万7千円にすぎない。それでもこの人は生保を受けようとせず、毎日のように高齢者無料職業相談所に通いつめて、ビルメンの仕事を探し求めていた。おそらく貯金がもう底をつきかねないのであろう。この人の例はある意味で極端な例かも知れないが、月に15万円前後の厚生年金で生活している高齢者であっても、その生活はそう楽ではない。どの高齢者もなるべく貯金には手をつけないようにしているという共通点が、今回の調査でわかったもうひとつの事実である。それは病気などのいざというときのための貯えとして「神聖不可侵」のものであろう。見事なまでの自立自助(Self Help)の貫徹。いったいこういう社会を戦前から引きずったままに放置してきた責任は誰にあるのだろうか。福祉を教える立場にある者としてこうした事実を虚心にうけとめなければならないと思う。

恩師の江口英一先生と違って無能で問題意識に乏しい私には、大したことも出来るはずがないのだが、まだ若さがあるから足で歩いて調査することくらいはできる。また事実を書きとめておくことはできる。それにしても写真というものは見る人の眼にもよるけれども、何と雄弁なものかとつくづく思う。私はせいぜいそう多くの人に読まれもしない論文という手段で、社会に事実を訴えかけるしかないのである。

なお、この写真集には子どもが多くとり扱われ

ていることも付言しておきたい。「信州の子どもたち（長野上田付近昭和24年）」という写真もある。子どもの純朴さは今も昔も変わらない。こうした子どもたちにどういうシステムの社会を残してやれるのか。それはもちろん私たちの責任である。

最後に本書の加太こうじ氏の文を掲載させてもらうことで、この書評の締めくくりとしたい。

「ゴルフ場の草むしりをして、わずかな収入を得る者がいる反面では、マイカーを連らねて高原のゴルフ場へ乗り込んでくる人たちもいる。日本は経済的にゆたかになったといっても、ゴルフ場をこまかに見ると、貧富の差は依然として残っていることがわかる。ただし、一応、ゆたかな生活をしていける者のほうが、貧しい人たちよりは多い。その配分の政策がうまく行っているから、日本では現状を維持しようとする政治勢力が、昭和40年代以降、安定勢力になったのだろう。」（本書、247ページ）

（この書評から、本書がどこか暗い内容のものとしてイメージされたとしたならば、それは私の責任である。被写体として本書に登場する人々は、貧しくみえても、皆、明るく力強い。生活の息吹きが伝わってくる。「庶民」と呼ばれる人々の健全な生命力と労働に支えられて、われわれの社会が成立していることを、この写真集は強く訴えているように思う。）

（1991. 1. 21 受理）